

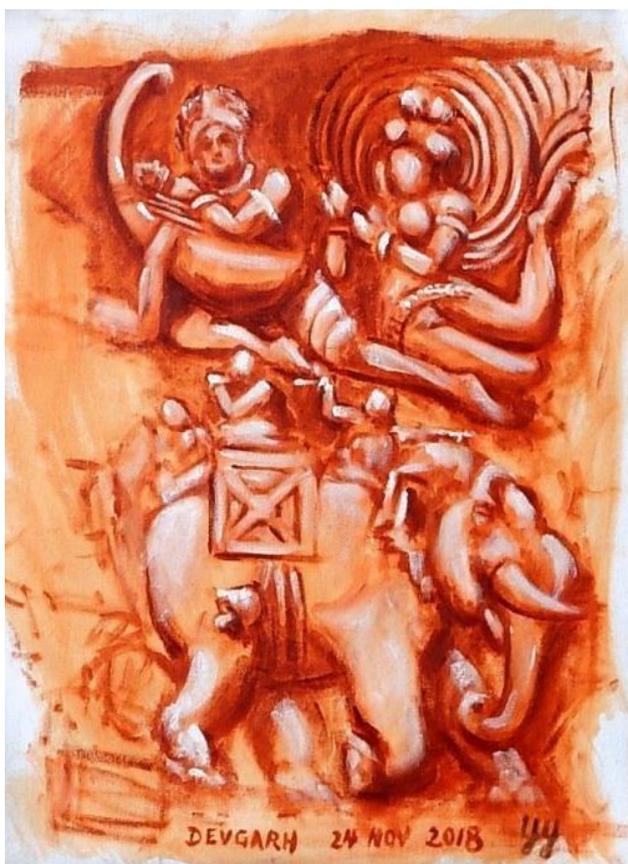
ヤンゴン素描 No. 47

山形洋一

インドの古い浮彫に見る「ビルマの豎琴」

竹山道雄氏はミャンマーを知らずに『ビルマの豎琴』書いたため、かの名作には事実誤認がいくつかあるそうです。たとえば、上座部仏教では、戒を受けずに勝手に僧になったり、僧が楽器を演奏することはあり得ない、とのことでした。

ついでに言うと、「ビルマの豎琴」ことサウンガウは、ミャンマーの特産品というより、仏教とともにインドから伝わったものと考えられます。その証拠が下記の図です。



インドの中北部のウッタール・プラデーシュ州（略して UP 州）の南、しずくのように垂れ下がるラリトプル県のデオガル

（Deogarh, Dvogarh）という小さな村で、この絵ような浮彫がごく最近（2012 年）発見されました。

今のところ公式な年代推定がなされていないようですが、私の見当ではグプタ朝でも比較的初期（紀元 4~5 世紀）のものと思われます。

「岩窟」はごく浅いもので、雨宿りすらできかねる程度のくぼみですが、上の岩盤が底のように突き出ているおかげで、彫刻面が雨水から守られ、黒い地衣類に汚されず、美しい岩の色を残しています。

この男女は「ガンダルバ」（Gandharva）と呼ばれ、膝をくずし足の裏を上に向けているのは、空を飛ぶ姿勢です。男が胸に抱えている楽器は、まさにサウンガウですね。違いは棹の先の形ぐらいものでしょうか。棹の根本から胴にかけて斜めに張った弦も、浮彫で示されています。右手は招き猫のような形で、弦の上に添えられています。サウンガウの前の L 字型の物体は、前を飛ぶガンダルバの脚です。

女のガンダルバは、同心円状に広がる天衣（てんえ、羽衣）につかまり、風に乗っているようです。腰の周りにはあるのは貴石宝石をつないだガードルです。

その下で、後ろ向きにゾウに乗っているのは、ガンダルバたちの主であるインドラ神（帝釈天）で、ほら貝（シャンク）を吹いて戦勝（ブッダの成道）を祝っています。

以上は「ビルマの豎琴」が彫られた部分の説明ですが、ついでに全体像もお見せしましょう。



浮彫は左右二面に分かれ、向かって右はお釈迦様が悟りを開かれた場面、左は説教のために行脚される場面です。話は右から左へ話が進むのですが、読みやすい左図からまず説明しましょう。

左図、お釈迦様の左右に従うのは菩薩でしょう。向かって左の菩薩は編んだ髪の毛に冠をかぶり、右手に拈子（ほっす）を、左手に水瓶（すいびょう）を持っています。右手の菩薩は螺髪（らほつ、巻き毛）で、長い柄のついた日傘をさしかけています。日傘の上に車輪があるのは転法輪、すなわちお釈迦様が説法をしていることを示します。

右図はお釈迦様を中心に三段からなり、下からたどると、竜王（ナーガ、ビルマ語でナガ一）の兄弟が蓮の花（蓮台、蓮華座）の茎を左右から支えています。

蓮台の上のお釈迦様は座禅を組み、右手で大地に触れ、まさに悟りを開かれた瞬間です。左右の魔物たち（魔羅、ビルマ語でマーラ）は弓矢で脅したり、死体を投げつけたり、娘の色気で誘惑につとめたりしますが、効き目がありません。「降魔成道（ごうまじょうどう）」と呼ばれる図像で、ミャンマーでもおなじみのものです。

お釈迦様の頭上にはボダイジュの枝が垂れ、さらに上に仏塔（ストゥーパ）らしいものが浅く彫られています。アーチが三つあり、中で座禅しているのは過去仏でしょう。

その両脇は天上界で、インドラがガンダルバを従え、釈迦成道を賛美している。その中に豎琴も見られるという、めでたく賑やかな構図です。（了）